

帰化植物は出現した植物の21%にあたり、4種の被度を合計すると21%にもなります。帰化植物は人間が地面を動かしたり植物を抜いたりした後に侵入してくるので、軽井沢の自生地はかなり人手が入っているようです。

次に、被度を見てみましょう。サクラソウ群落と同じくらいに広がっている場所を調べるので、サクラソウについては軽井沢で40%、田島ヶ原で34%という近い数値になっていますが、出現した植物の被度を合計すると軽井沢では約114%に、田島ヶ原では約87%になっています。このことから軽井沢では植物がぎっしりと重なりあっていて、田島ヶ原では隙間のあることがわかります。このことは、サクラソウが花を咲かせる頃、軽井沢では多くの植物がすでに成長を始めているのに、田島ヶ原では植物の種類が少なく、そのうえ植物の発芽が始まったばかりということに関係しているようです。田島ヶ原に植物の種類が少ないのは、夏にオギやヨシが茂るために、その下は日陰になって植物があまり生えないためだということが分かっています。したがって、軽井沢のサクラソウは多くの植物と厳しい生存競争をしながらたくましく生きているのに対して、田島ヶ原のサクラソウは多くの植物との厳しい生存競争を避けて、オギやヨシの下の少ない植物の間でひっそりと生きているのでしょう。

こうして比べてみると、一口にサクラソウ自生地といっても、場所によって環境や植生のようすが、ずいぶんと違っているのが分かると思います。

最後に、サクラソウの訪花昆虫の調査についてまとめておきます。この日は晴天で、11時30分の気温は25℃という穏やかな一日でした。園内ではエソタンポポ・セイヨウタンポポ・ハルジオン・カキドオシ・ラショウモンカズラ・ヒメオドリコソウ・タチイヌノフグリ・ハナイバナ・サクラソウ・クリンソウ・ミツバツチグリ・ミヤマガラシ・ナズナ・コンロンソウ・イヌナズナ・ミミナグサ・コハコベ・ウシハコベ・クサノオウ・ムラサキエンゴサク・ニリンソウ・リュウキンカ・スズメノカタビラ・ミソイチゴツナギ・イチゴツナギなどが開花期を迎え、昆虫もいろいろと飛び交っていました。サクラソウの受粉を助ける昆虫として有力な、蝶類・コハナバチ類・マルハナバチ類に重点をおいて調査したところ、ウスバシロチョウ・スジグロシロチョウ・モンキチョウ・ツマキチョウ・コムスジ・ベニシジミ・ヤマトシジミ・イチモンジセセリ・ダイミョウセセリの9種の蝶類を確認しましたが、サクラソウの花には11時15分から13時30分の間にスジグロチョウ(2)・ツマキチョウ(2)・イチモンジセセリ(1)の3種が吸蜜に飛来しただけでした。なお、13時20分頃にマルハナバチ(1)が飛来してきましたが、サクラソウの花に止まった瞬間、滑るように草の間に入ってしまい吸蜜はしませんでした。

(埼玉野生植物研究所 所長)



⑥ サクラソウ自生地のサクラソウ群落 (軽井沢植物園, 2005.26)



サクラソウ群落と出現する植物の状況 (表1)

田島ヶ原 (00.4.17調査)				軽井沢 (00.5.26調査)			
出現植物	被度	高さ	開花期	出現植物	被度	高さ	開花期
サクラソウ	34%	14cm	※	サクラソウ	40%	16cm	※
オギ	29%	17cm		ハナタデ	20%	12cm	
アマナ	16%	7cm		シラヤマギク	12%	32cm	
ノウルシ	2%	17cm	※	コハコベ	12%	21cm	※
ノカラマツ	2%	7cm		スギナ	4%	28cm	
ヤエムグラ	2%	3cm		オハシソウ	4%	22cm	
スギナ	1%	17cm		ツリガネニンジン	4%	22cm	
ヨシ	1%	15cm		ヒメジョオン	3%	7cm	※
ヤブガラシ	+	5cm		ミソイチゴツナギ	3%	42cm	※
				イチゴツナギ	2%	31cm	※
				スズメノカタビラ	2%	18cm	※
				ハナイバナ	2%	9cm	※
				ワレモコウ	1%	23cm	
				カラマツソウ	1%	22cm	
				ツボスミレ	1%	19cm	
				タチイヌノフグリ	1%	15cm	※
				ウシハコベ	1%	6cm	※
				ゲンノショウコ	1%	5cm	
				ミミナグサ	+	17cm	※

備考:調査面積は1m²の区画です。被度は出現した植物が、調査した区画の中を占める割合を%で示したものです。割合が1%未満の場合は+で示してあります。開花期の植物は、※で示してあります。

荒川公園の湿地にサクラソウ自生地を 出現させるための試み

磯田 洋二

国指定の特別天然記念物田島ヶ原サクラソウ自生地には、現在100万株以上ものサクラソウが生えていて、春になると原野のあちこちを紅色の花が埋め尽くし、それを見に大勢の人々が集まってきました。サクラソウの数も、そして、それを見に来る人の数も、ここ数年間はあまり変化していません。それで、この状態がいつまでも続くように感じられますが、雨が降ると膝まで潜ってしまうほどの湿地だったこの場所も、今ではかなり乾いてしまい、サクラソウには生きにくい環境に変わっているのです。このままの状態が続くとサクラソウの数は次第に減って、やがて絶滅することが予測されているのです。

サクラソウが絶滅しないように、この場所をもとの湿地に戻せば良いのですが、人手もお金もかかることなので、今のところそのような対策はとられていません。だからと言って、このままサクラソウが絶滅するのを、ただ見守っているわけにはいきません。この場所を湿地に戻してサクラソウに絶滅の恐れがなくなる時がくるまで、サクラソウを絶やさないための工夫や努力を続けているのです。

その工夫の一つが、指定地とは別の場所にサクラソウの

生育に適した湿地を見つけて、そこに指定地のサクラソウを繁殖させておき、いざ指定地でサクラソウが絶滅という場合に、この繁殖させておいたサクラソウによって指定地の復活を行うという計画です。

この工夫を実現するために打って付けの場所が見つかりました。指定地の脇を流れる鴨川の対岸にある『さいたま市立荒川公園』がそれです。公園はJR武蔵野線の鉄橋と彩湖の流入堤との間にある約4.1ヘクタールの敷地に駐車場があるだけで、他には大きな池とオギの生い茂る湿地が広がっていて、荒川の河川敷の自然を再現した広大なピオトープになっています。この場所はオギの草原で、しかも、湿地ですからサクラソウの生育に適しているはずですが、また、この場所にサクラソウを繁殖させることは、荒川の河川敷の自然を再現する公園の目的にも合っています。

作業は9年6月13日に指定地のサクラソウから種子を採ることで始まりました。採った種子は乾燥しないように保存して、翌年の3月16日に蒔いて苗を育てました。こうして育てた苗を平成11年3月1日に『サクラソウ増殖実験地』へ植えたところ、4月には見事に花が咲きました。種子を採ってから花が咲くまでに約2年間かかりました。サクラソウがここで無事に繁殖していくといいですね。工夫のようすを写真で紹介します。

(田島ヶ原サクラソウ自生地保護増殖実験調査検討委員会委員)



① オギの原野を機械で耕す (平成11年3月1日撮影)



② サクラソウの苗を植える (平成11年3月1日撮影)



③ サクラソウの苗を植え
終わった増殖実験地の
ようす
(平成11年3月8日撮影)



④ サクラソウの花で埋まった増殖実験地のようす (平成11年4月17日撮影)

さくらそう通信 14号 平成14年3月25日

編集・発行 さいたま市教育委員会

さいたま市常盤6-4-4 ☎048-829-1721